

金沢大学社会教育研究室の歩み

(その七)

— 昭和四十一年度 —

まえがき

一、研究生募集

二、入室式

三、研究員研究会

四、学内解放講座

五、学外解放講座

六、社会教育調査

七、刊行物

八、研究事業分担表

まえがき

年が明けてからの研究員会は、その年の四月から始まる新年度の調査・研究活動をどうすすめるかについて、前年度の反省をふまえて意見を交わすならわしである。三月三十一日発行の季報第十二号所載の記事によれば、一月十八日、二十五日の二回にわたる討議の結果、成案を得たとある。その概略を示すと左記の通りである。

昭和四十一年度の目標

- (1) 研究員の共同研究体制の推進
- (2) 開放講座の計画化、とくに講座内容の系統性を確保する

。原理研究部門

研究テーマ

- (1) 公民館に関する研究
- (2) 勤労青少年に関する研究
- (3) 婦人教育に関する研究
- (4) 成人教育に関する研究
- (5) 大学の社会教育的機能に関する研究

実践の方策研究部門

(1) 学内開放講座

学習意欲のある市民に学習の機会を提供し、当研究室を開放

農村問題研究部会

婦人教育研究部会

社会心理学研究部会

社会思想研究部会

仏教思想研究部会

右の五研究部会を開設、当研究室研究員を講師として、各部会それぞれ年間約十回ゼミナール形式でその学習を進める。

(2) 学外開放講座

夏季休暇中、開催希望の地教委と共催

(3) 社会教育研究集会を開く

一、研 究 生 募

集

当研究室は開設以来毎年学習意欲のある市民に、年令・性別・学歴のいかんを問わず、研究室を開放し、学習の機会を提供している。この旨を新聞・ラジオ・テレビを利用して三月中一ヶ月間報道し、研究生として応募在籍するよう広告する。例年新規に応募するものと、前年度から引き続いて継続を希望するものとが略々同数で、その年度の在籍者が構成されて来た。四十一年度は、新規応募の研究生八十二名、継続希望の研究生七十六名、計百五十八名である。その性別・年令別構成は下表の通りである。

四月三十日（土）入室を希望する人たちの面接を午後二時より行う。入室許可は各学部から選出された委員で構成された運営委員会

調査研究部門

北陸における公民館の実態調査を実施する。

一見前年度と変らないようであるが、前年度まで実施してきた事業項目を一件新年度から中止することになった。それは学内開放講座の一環として当研究室発足当初来開催してきた「社会教育講座」である。この講座の中止の是非をめぐり激論が交わされ、一応中止することになったいきさつがある。一月二十五日の研究員会で得られた成案に盛られなかったが、新年度の活動を開始してから、六月七日の研究員会で、新らしく「共同研究会」が発足することになったことを付記しておかねばならない。

その他、研究生の募集、紀要の発行、社会教育関係図書・資料の整備拡充等については従前通りである。

年令	性	男	女	計
60才以上		16		16
50才台		16	6	22
40才台		15	13	28
30才台		31	17	48
20才台		28	10	38
20才以下		1	5	6
計		107	51	158

でなされることになっているが、本年度の運営委員会が四月二十二日（金）に開かれた際、入室許可の件については、必要書類整い次第持ち廻りとする事となったので、面接の結果得た案について各運営委員の了承を得て、五月二日付で入室許可書と五月七日午後二時より入室式を教育学部第一中講義室

において開催する旨を入室を許可された方々に通知する。

二、入 室 式

昭和四十一年五月七日（土）午後二時より予定通り行う。

出席者 百三十一名

十三時三十分—十四時 受付

十四時—十四時四十五分

密田室長挨拶

松尾協力会副会長挨拶

研究員紹介

三、研 究 員 研 究 会

昭和四十一年度の研究員は左記の十名である。

（五十音順）

- | | |
|-----------|----------------|
| 出雲路 暢 良 | （教育学部講師・倫理学） |
| 岩 男 耕 三 | （教育学部助教授・社会学） |
| 沢 田 忠 治 | （教育学部教授・教育心理学） |
| 新 谷 賢 太 郎 | （教育学部教授・哲学） |
| 神 力 甚 一 郎 | （教育学部教授・教育哲学） |
| 戸 頃 重 基 | （法文学部教授・倫理学） |
| 永 守 良 治 | （教育学部教授・歴史学） |
| 橋 本 芳 契 | （法文学部助教授・宗教学） |
| 三 島 宗 彦 | （法文学部教授・法学） |
| 南 好 彦 | （教育学部助教授・農学） |
- 三島研究員は十二月立命館大学に転任されたので、その後は九名で研究員研究会を開く。

オリエンテーション

十四時四十五分—十五時十五分 オリエンテーションをふま

えて、研究生の各研究部会所属を希望調査する

十五時二十分—十六時三十分

記念講演

講師 戸頃重基教授

題 「明治百年か戦後二十年か」

四十一年度は左記の通り十三回開いた。（研究員研究会は火曜日午後開くよう申し合せている。）

- | | |
|----------|----------|
| ① 四月十九日 | ② 四月二十六日 |
| ③ 五月七日 | ④ 五月十日 |
| ⑤ 五月二十四日 | ⑥ 六月七日 |
| ⑦ 六月二十八日 | ⑧ 七月十一日 |
| ⑨ 九月十三日 | ⑩ 九月三十日 |
| 四十二年 | |
| ⑪ 一月十七日 | ⑫ 一月三十一日 |
| ⑬ 二月二十一日 | |

四、学 内 解 放 講 座

(一) 農村問題研究部会

南・出雲路両研究員担当

阪本楠彦著「日本農業十一話」(東大新書)をテキストにし、金

沢大学法文学部教授・石井俊之氏と石川県農業試験場長・中川竜一氏を助言講師に煩わし、ゼミナール形式の学習を進める。必要に応じ現地学習を行う。

- | | |
|----------|----------|
| ① 四月二十八日 | ② 六月三日 |
| ③ 六月十六日 | ④ 六月二十四日 |
| ⑤ 七月十四日 | ⑥ 八月一日 |
| ⑦ 八月九日 | ⑧ 十月四日 |
| ⑨ 十月二十一日 | ⑩ 十月二十八日 |
| ⑪ 十一月七日 | ⑫ 十二月四日 |
| | 四十二年 |
| ⑬ 十二月十六日 | ⑭ 一月二十二日 |
| ⑮ 一月二十三日 | ⑯ 一月三十日 |
| ⑰ 二月十八日 | ⑱ 二月二十二日 |
| ⑲ 三月十日 | |

付記、当研究部会は学習の場を学内の本研究室のみならず、石川県立社会教育センターや石川郡松任町山島公民館に出向き、学習の必要に応じ多角的な学習形態を力動的に実施した。

また、当研究部会が従来担当して来た、農村文化研究集会の第七回集会を昭和四十二年三月十一日十二日の両日、石川県立社会教育センターにおいて開催したのであるが、このことについては、五、学外開放講座の欄に別記する。

(二) 家庭教育研究部会

三島・神力両研究員を指導講師とし、

勝田守一著「家庭の教育」全四冊中総論的部分に当る第一巻「教育とはなにか」をテキストに取り上げ、ゼミナールを系統的・継続的に進めた。

- | | |
|-----------|----------|
| ① 五月十三日 | ② 六月三日 |
| ③ 六月十七日 | ④ 七月八日 |
| ⑤ 七月十六日 | ⑥ 九月十六日 |
| ⑦ 十月十四日 | ⑧ 十一月十八日 |
| ⑨ 十二月九日 | 四十二年 |
| ⑩ 十二月二十四日 | ⑪ 一月二十日 |

取り上げたテキストが比較的平易な文章で書かれており、理解し易いために、テキストから出発しながら、テキストを離れて、各自が家庭教育上当面している具体的諸問題を出しあって、それについて研究生がそれぞれそれなりの意見を交換する話し合いが活潑に行われ、たのしい雰囲気毎回進められた。

六回以降は三島研究員が外国出張のため不在となり、神力研究員が専ら指導にあたった。

(三) 社会思想研究部会 戸頃研究員が指導講師となり、前年度に引き続き、自著「現代の組織悪」をテキストとし、ゼミナール形式の学習を進めた。

- | | |
|----------|--------------|
| ① 四月二十三日 | ② 五月二十八日 |
| ③ 六月十一日 | ④ 七月九日 |
| ⑤ 十月二十二日 | ⑥ 十一月十二日 |
| ⑦ 十二月十七日 | ⑧ 四十二年一月二十八日 |

⑨ 二月二十五日 ⑩ 三月二十七日

毎回、先ずテキストを読み、著述当時の時代相と今日の状況を對比させながらそこに記された著者の意図を説き、次いで質疑応答、更に関連した今日の諸問題を出しあいながら各自の意見を交換し、最後にその日の学習のまとめを指導講師がする。

(四) 社会心理学研究部会 沢田研究員を指導講師として、南博著「社会心理学入門」をテキストに選び、毎回ゼミナール形式の学習を進める。

① 五月十四日	② 六月四日
③ 七月十六日	④ 九月十日
⑤ 十月十五日	⑥ 十一月十九日、二十日
⑦ 十二月三日	⑧ 四十二年一月二十一日
⑨ 二月十一日	⑩ 二月十八日
⑪ 三月四日	⑫ 三月十八日

テキストを当研究部会のメンバーで論読することを連年継続して学習のなかに織り込んで来たが、メンバーが新規応募者と前年度からの継続者との混成のため、例年新規応募の研究生のなかで、ひとまへの音読に強い抵抗を覚えると思われるひとがあるように感じとられるところから、本年度はこうした抵抗感を覚える余地のないように、新規応募の研究生が、グループ学習のなかにおのづから無理なく溶け込めるよう特に配慮して学習を進めたいと思っている。と指導講師の沢田教授から編集員に意見の開陳があった。印象に残る貴重な発言である。

(五) 仏教思想研究部会 橋本研究員を指導講師とし、前年に引き続き福田正治編「仏教聖典」をテキストに選び、ゼミナールを行い、大学開放講座の学習の系統的継続性の樹立につとめる。

① 五月二十一日	② 六月十八日
③ 七月三十日	④ 九月十七日
⑤ 十月十五日	⑥ 十一月二十六日
⑦ 十二月二十四日	⑧ 四十二年一月十四日
⑨ 二月四日	⑩ 三月十一日

テキストを読みながらも、毎回の討議の中心を「現代人と仏教思想」に置き、この間、仏教の現代的役割はどうなっているか、社会生活の向上、進歩に宗教としての仏教がなにを果してきたか、家庭における宗教のありかたはどうか。社会教育と個人の修養・自覚との間にある家庭教育をどうするか。仏教の学問的研究の実情はどうなっているか。などのトピックをめぐって各自の意見を交換し、仏教思想研究のねらいは、宗教的心理としての仏法の体験的実証にあることを確かめた。

付記 以上五研究部会はそれぞれ土曜日午後一時から四時半までが学習時間である。月に四回の土曜日に五研究部会を開くことは、いろいろ障害があり、各研究部会月一回開く原則を貫くこともできないのであるが、幸い農村問題研究部会は午後五時半以降に開かれるので、学習日開催の件については毎月スムーズに進めることができた。

(六) 共同研究会 この催しはさきにも記したように本年度から新しく企てられたものである。
開くまでのいきさつ 五月二十四日の研究員研究会において、次のような趣旨の動議が一研究員から提起された。

「従業、研究生はそれぞれの研究部会に所属して、その学習を進めてきた。そしてその成果も徐々に上りつつある。しかし各部会の間には緊密な連絡がなかった。そこで本年は共通のテーマのもの

とに全研究生・研究員による共同研究会といった機会を持つてはどうか。」

と。当日はこれを是とし次回はこの企画の具体的実施案を検討することになった。

六月七日の研究員研究会において次のような成案を得て実施に移すことにし、六月二十五日(土)第一回を開く運びになった。

○ 回数は年間五回、原則として土曜日の午後教育学部会議室を会場として開く。

○ 各回の提案・運営・記録等は五研究部会がそれぞれ一回ずつ担当する。学習形態は各担当部会に一任する。

○ 昭和四十一年度共同研究会

統一テーマ

現代社会における家庭の問題

——今日の社会において家庭はなにをなしうるか——

○ 右の統一テーマをめぐって各回の研究テーマを樹て、その担当部会をきめる。

第一回 六月二十五日(土) 午後一時—四時半

今日の家庭はどのような問題に直面しているか。

担当 農村問題研究部会

第二回 七月

家庭内の人間関係

担当 社会心理学研究部会

第三回 九月

社会経済のなかの家のモラル

担当 社会思想研究部会

第四回 十月

人間形成の場としての家庭の位置と役割

担当 家庭教育研究部会

第五回 十一月

家庭のなかの宗教のありかた

担当 仏教思想研究部会

○ 各回の記録をつくり、もよりの「季報」に掲載する。

以上の成案を得た。

実施経過 第一回共同研究会の予定は六月二十五日であったが、都合のため一週間繰り下げて、七月二日金沢大学職員会館において開く。

第二回 七月二十三日(土)

教育学部会議室

第三回 十月一日(土)

教育学部会議室

第四回 十一月五日(土)

教育学部会議室

第五回 十一月二十六日(土)

教育学部会議室

参加者数は次の通りである。

第一回六十五名、第二回四十二名、第三回三十六名、第四回三十八名、第五回三十一名

各回の詳細な記録は、第一回「季報」第十三号、第二回「季報」第十四号、第三・四・五回「季報」第十五号に所載。

さきにも記したようにこの共同研究会は本年はじめての試みであったが、各研究部会の指導講師の指導助言と各メンバーの協力によって成功裡に終り、参加した研究生から来年度も是非開いて欲しいと強い要望があった。

五、学 外 開 放 講 座

(一) 第七回 農村文化研究集会

日時 昭和四十二年三月十一日(土) 十三時半—十六時

〃 三月十二日(日) 九時—十二時

会場 石川県立社会教育センター

〇開会までのいきさつ

十二月十六日 農村問題研究部会の集会で第七回農村文化研究集会を「生きぬく姿勢の探求」の集会とすることとし、実行委員を選ぶ。ついで四十二年一月十六日、一月二十三日、二月十八日、二月二十二日、三月十日の会合を経て当日を迎える。

〇第七回集会の基本性格

過去六回の集会は、いろいろ廻り道をしたようではあったが、結局「他人にたよっていたのでは駄目だ。それはどんな困難なことがあっても農民自身が立ち上らなければならないのだ」ということを確認した。そしてそれと同時に「誰がやらなくても、おれがやるんだ」と意欲を燃やし、苦しいなかからコツコツと努力を続けているたくましい人たちのあることもわかった。

そこで今年は意欲を燃してとりくんでいる生産の現場の若い農民のかたがたに集っていただき、お互いの実践の苦しみとよろこびを語りあっていたくことを通して、各自の意欲をたしかめあい、問題の所在を明かにし、この集会をきっかけにして横に手をつなぎ、そのことによってお互の努力を少しでも実り多いものにする、ための集会とする。

〇 本集会の出席者 七十八名

〇 第七回集会の成果をまとめ「続明日への探求」と題して出版す

ることにし、編集委員を選び、昭和四十二年度中にその実現を期す。(昭和四十二年四月一日の農村問題研究部会においてきめる。)

(二) 夏季地方講座

本年は左記十三ヶ所の地教委の要望を容れ共催する。

① 小松会場	小松市中央公会堂	七月十一日	道德をどうとらえるか	新谷賢太郎
		七月十四日	親鸞に学ぶもの	出雲路暢良
		七月十八日	家庭と法律	三島 宗彦
		七月二十一日	当面の宗教問題	橋本 芳契
		七月二十五日	日本の宗教問題	神力甚一郎
		七月二十八日	日本教育の課題	
八月一日		八月四日	これからの家庭教育	沢田 忠治
八月八日		八月十一日	アジアの中の日本	岩男 耕三
八月二十一日		八月二十五日	これからの日本の食糧問題	南 好彦
八月二十九日		九月一日	これからの日本の物価はどうなるか	進藤 牧郎
九月五日		九月八日	科学時代の中の哲学の動き	戸頃 重基
九月十二日		九月十五日	昭和史のとらえ方	永守 良治
九月十九日		九月二十二日		

(付記、小松会場は本年度文部省委嘱の大学開放講座を当研究室が担当して開いたもの)

(付記、小松会場は本年度文部省委嘱の大学開放講座を当研究室が担当して開いたもの)

② 美川会場 美川町公民館

七月二十六日 美川町の発展をめざす社会教育はど
うあるべきか 神力甚一郎
七月二十七日 公民館運動を支えるもの 三島 宗彦
七月二十八日 これからの日本と美川 永守 良治
七月二十九日 美川の地的特色とその開発 矢ヶ崎孝雄
七月三十日 美川文化とそのゆくえ 橋本 芳契
八月二十四日 地域開発と住民自治 新谷賢太郎
八月二十五日 最近の青少年問題とその対策 出雲路暢良
八月二十六日 婦人会を調査して 沢田 忠治
八月二十七日 これからの農業と農村 南 好彦
八月二十八日 県民性の診断とこれからの社会倫理 戸頃 重基
(付記、美川会場は次の六、調査研究においてしるす。美川町公
民館調査の一環としてとくに配慮したものである。)

③ 加賀市会場

八月十八日 子どもと家庭 出雲路暢良
八月十九日 道徳をどうとらえるか 新谷賢太郎
八月二十日 地域開発と教育計画 神力甚一郎
八月二十一日 産業教育の課題 南 好彦
八月二十二日 現代人の宗教意識 橋本 芳契
(付記、加賀市会場は地元の要望により毎回会場を変更して実
施。湖北小学校・大聖寺公民館・作見公民館・動橋北国銀行ホ
ール・庄小学校)
④ 山中会場 山中町温泉会館
八月八日 現代の世界状況 岩男 耕三
八月十日 最近の物価高とそのくらし 進藤 牧郎
八月十一日 新しい親孝行 戸頃 重基

八月十二日 新興宗教はどうみるべきか 橋本 芳契
八月十三日 家庭の中の人間関係 沢田 忠治
⑤ 鶴来会場 鶴来町中央公民館
八月七日 地域開発をめざす社会教育 神力甚一郎
八月八日 新しい親孝行 戸頃 重基
八月九日 現代の世界情勢 永守 良治
⑥ 津幡会場 津幡町中央公民館
七月二十五日 日本における議会政治の歩み 永守 良治
七月二十六日 世界の中の日本 岩男 耕三
七月二十七日 現代人の宗教意識 橋本 芳契
七月二十八日 組織時代における個人の地位 新谷賢太郎
⑦ 高松会場 高松町公民館
七月十三日 地域開発と住民自治 新谷賢太郎
七月二十日 社会保障制度の現状と将来 三島 宗彦
七月二十七日 国の財政と地方自治体の財政 進藤 牧郎
八月三日 戦後二十年の農業事情 南 好彦
八月十日 所得倍増計画挫折の原因は何か 戸頃 重基
⑧ 鹿西会場 鹿西中学校
七月二十三日 家庭教育について 沢田 幸平
七月二十八日 能登と交通 矢ヶ崎孝雄
八月三日 くらしの中の経済 岩男 耕三
八月五日 家族関係と道徳 橋本 芳契
八月十一日 最近の農村事情とくらし 南 好彦
⑨ 鳥屋会場 鳥屋町公民館
八月二十六日 青年期の心理とその取扱い 沢田 忠治
八月二十七日 戦後二十年の問題点 永守 良治

八月二十八日 世界の中の日本

八月二十九日 子どもと家庭

八月三十日 日本農業の現状と将来

⑩ 鹿島会場 久江小学校

八月二十二日 家庭の中の間人間関係

八月二十三日 選挙を正しく明るくするには

八月二十四日 新しい親孝行

⑪ 富来会場 富来町小学校

七月三十一日 子どもの心理と家庭教育

八月 一日 生活の場の改善

八月 二日 現代の世界情勢

⑫ 中島会場 中島町役場

七月二十三日 選挙を正しく明るくするには

七月二十四日 戦後二十年史の問題点

七月二十八日 国の財政と地方自治体の財政

七月三十日 地域開発と住民自治

八月 六日 米づくりはどうなるか

⑬ 輪島会場 輪島市中央公民館

八月 三日 子どもと家庭

八月 五日 学校教育と家庭教育

八月十二日 青年期の教育

八月十九日 純潔教育をどうすすめるか

九月 二日 現代の世界情勢

○以上十三会場の場所・日時・講義回数は地元教育委員会において決定

午後の会場―六

夜間の会場―七

午前を希望するところはなかった。

○講義題目設定については左記の要領ですすめた。

昨年の反省をふまえて、この地方講座が関連のない単なる講演の寄せ集めにならないように、一講座が一つのまとまりのあるものにするためつぎのように「講座名」を立て、その内から講座名単位に選ぶようにした。

「講座名」を立てるに当っては、講座開設希望地から「どんな話しを聞きたいか」のアンケートをとり、それに基いてさまざまな「講座名」を立てた。

A くらしと政治

1 選挙を正しく明るくするには

2 日本における議会政治の歩み

3 近代百年史を顧て思うこと

4 戦後二十年史の問題点

5 現代の世界情勢

B くらしの中の経済

1 最近の物価高と庶民のくらし

2 家計簿のつけ方と生活設計

3 所得倍増計画挫折の原因はなにか

4 国の財政と地方自治体の財政

5 社会保障制度の現状と将来

C 地域開発

1 社会教育と地域開発

2 地域開発と公害問題

3 地域開発と教育計画

4 地域の経済開発と社会開発

5 生活の場の改善

6 地域開発と住民自治

D 農村問題

1 日本農業の現状と将来

2 米づくりはどうなるか

3 家づくりと村づくり

4 農家のあととりと教育問題

5 これからの農村の衣食住

E 家庭教育

1 家庭の教育的役割

2 家庭の中の人間関係

3 子どもの心理と家庭教育

4 青年期の心理とその取扱い

5 純潔教育をどう推し進めるか

6 家庭学習

F 現代の社会倫理

1 組織時代における個人の地位と役割

2 イデオロギーにおける保守と進歩

3 世界の中の日本の地位

4 愛国心——これまでとこれから

六、社会教育調査

昭和四十一年度の前半は、前年取り組んだ公民館調査（石川県美川町の場合）の第一次調査結果をまとめ、これを次項七、刊物物において記すように「社会教育」第七号に発表した。年度の後半は、

5 新しい親孝行

6 人間革命か社会革命か

7 現代における民族主義の問題

G 現代の宗教問題

1 日本文化と仏教

2 日本仏教と道徳

3 新興宗教はどう見るべきか

4 現代人の宗教意識と無神論

5 社会教育における宗教の役割

H くらしと芸術

1 日本の仏像

2 九谷焼の歴史

3 流行歌百年史

4 現代の絵画

5 石川県文学者群像

○ 右記の「講座名」と「講義題目」を表示して「講座名」の選択を開講希望地の教育委員会におまかせした。その結果は「講座名」単位の選択ではなしに「講義題目」単位の選択となり、さきに記した各会場の開講となった。但し、①小松会場・②美川会場はそれぞれの地教委の協力を得て別個に配慮立案企画し実施した。

第二次美川公民館調査のすすめ方をめぐる諸問題を検討し、実施に備えた。

年度の前半における調査の足どりについては「社会教育」第七号

——昭和四十一年九月発行——掲載の調査報告、まえがき、にしたためたので、その後の年度後半の足どりを記す。

美川公民館第二次調査の一部として、美川町教育委員会と共催して、七・八月にわたり、前後二部に分けて、十回の大学開放講座を開いた。前項の②美川会場の記事がそれである。講義内容は主として第一次調査の結果を織り込んだものである。また第二次調査に備えて、聴講者に種々のアンケートを求めた。

九月三十日の研究員研究会において、今後の第二次調査は小委員会によって検討され、立案・企画・実施を推進することになった。美川公民館第二次調査実行委員会として、神力研究員がチーフとなり、他に永守・岩男・出雲路の三研究員が選ばれた。

十月十三日・十七日・二十七日・十一月七日の委員会において、第二次調査の基本線が討議され、昭和四十二年度中に発行予定の「社会教育研究」第八号に第二次調査報告を發表することになった。

七、刊 行 物

○年報 九月三十日付で「社会教育研究」第七号を発行、その内容は次の通りである。

公民館調査——石川県美川町の場合……共同執筆

昭和初期の石川県における農村青年の学習活動について

——実業補習学校と読書運動を中心にして——

小松 周 吉
コパレー・アーレンスの「自由ドイツ青年運動年代記(1)」

増 永 良 丸

「金沢大学社会教育研究室農村問題会」の学習活動

南 好 彦

十二月五日・十二日・二十日・二十三日の委員会では、公民館の本質・その機能・職員の職務など、総括的事項について改めて検討を加えた。

昭和四十二年二月十三日の委員会では、美川町の地域課題とそれに対応する住民の意識の現状、それらとの美川町公民館のとりくみについて各委員の意見を交換し、第二次調査の調査主題および調査項目を検討。

二月二十六日 出雲路研究員「蝶屋地区部落公民館長および社会教育主事会」に出席。

三月七日 岩男・出雲路両研究員は、井関公民館および美川町役場産業経済課・土木課を訪問し、資料を集めるとともに現地における聞きとりを行う。

三月十七日・二十三日・三十一日の委員会においては、調査票の原案の作製とその検討。

出雲路 暢 良

○季報

十三号より十六号を発行(タイプ印刷)

季報 第十三号(九二頁) 昭和四十一年七月十五日発行(四五〇

部)

手洗い……………

手取川物語……………

石川県の青年学級……………

第六回農村文化研究集会記録

昭和四十一年度第一回共同研究会記録

桐 元 武 一

出雲路 暢 良

山 本 松 雄

季報 第十四号 (六二頁) 昭和四十一年九月三十日発行 (四五〇部)

教育に対する「社会の要請」ということ……

社会教育雑感……………

青少年問題偶感……………

おやじ不在の家庭教育……………

夫婦関係

旧人へ

夏季地方講座講義要項

昭和四十一年度第二回共同研究会記録

季報 第十五号 (七五頁) 昭和四十一年十二月二十五日発行 (四五〇部)

社会教育と地域住民の自発性

思想の空洞化と公明党の進出

建国記念日と家庭の日に関し

生活と「ことば」

昭和四十一年度当研究室研究事業分担表

総務

庶務・会計

刊行

社会教育調査

開放講座

農村問題研究部会

家庭教育研究部会

密田・新谷

瀬尾・清水

新谷・出雲路

神力・永守・岩男・出雲路

新谷・戸頃・出雲路

南・出雲路

神力・三島

社会教育的な短歌指導の一面

石川県立社会教育会館

金沢市の青年学級の現状と問題点

研究生として入室して五年

昭和四十一年度第三・四・五回共同研究会記録

季報 第十六号 (四六頁) 昭和四十二年三月三十一日発行 (四五〇部)

大学における宗教研究

農村文化研究集会の討議より

地域開発と社会教育

石川県下におけるPTAの現状と

問題点および対策について

珠洲市社会教育の現状

私の宗教遍歴

昭和四十二年度研究事業計画(案)

○ 月報 毎月下旬発行 翌月の行事予定通知

社会心理学研究部会

社会思想研究部会

仏教思想研究部会

沢田

戸頃

橋本

藤田 福夫

中野 巳之吉

吉川 実

米田 民男

橋本 芳契

南 好彦

広瀬 稔

小林 忠雄

木谷 伝一

島口 雅光